

この特集趣旨文を書いている現在、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染が確認されてから、すでに二年が経過した。居住場所や生活様式によって異なるだろうが、この感染症の流行によって再認識させられたのは、私たちは頻繁に移動していたということである。移動が難しくなって、改めてそのことに気づかされた。

感染症と関わってよく言及された中国の都市名を聞くと、李白の唐詩「黃鶴樓にて孟浩然の広陵に之^ゆくを送る」を思い出す。この作品には、揚子江流域の美しい風景が詠まれている。二〇二〇年の夏、ちょうど当地で開催される学会に参加予定であったため、その風景を直接見られなくなったことが悲しかった。そして、当地で大変な生活を強いられている人々のことが心配になった。

現在、社会を取り巻く苦境に思いをはせ、その状況の改善を願う人々は非常に多いだろう。しかしながら、その一方で不安になるのは、感染症が流行して以降、思いやりとは正反対の思考が拡大しているように思われることだ。差別が蔓延しているのである。たとえば、二〇二〇年五月の新聞記事では次のような状況が紹介されている。

新型コロナウイルス禍で、非常に深刻な差別が頻発しています。普段から地方議員を含めた政治家ら公人の差別発言を集めて記録していますが、一月以降はコロナ関係が7〜8割を占めます。（中略）ウイルスを国籍や人種、民族と結びつけたSNSでのヘイトスピーチが目立ちます*。

この記事は、特に感染症が最初に確認された都市と、その都市を含む国家に住む人々への差別があることを報告している。先ほど、抒情的な唐詩の舞台としてその都市に言及したが、加えて当地は、日中戦争で日本が侵攻した

場所でもある。当時、日本人がその国家の人々に対して差別的な眼差しを向けてしまったが、今日における差別は、そうした憤るべき歴史を参照することなく行われてしまっている。日本人がアジアの人々に対して用いる言葉にどれほどの重みが生じてしまうのか、慎重にならなければいけない。

さらに恐ろしいのが、この差別は言葉の暴力に留まっていけないということだ。この記事では続けて、外国籍の児童が多く通う教育機関だけがマスク配布の対象から外されたり、保護者の休業補償が特定の業種のみ対象にならなかったりした事例に言及している。これらの政策は最終的には改善されたが、危うく施行されるどころであった。

このように、差別は言葉の暴力に留まらず、生かす人々を選別するという直接的な政治の問題なのである。ここで想起されるのが、生政治という術語である。よく知られた術語だが、こうした記事を読むと、改めてこの理論が射程としている時期に我々が生きていることを痛感させられる。感染症が流行している日本社会においては、「日本人」という仮構された属性を根拠として、その外部である「他国人」に相当する人々を排除するような力学が作用しているのだ。

本特集は、こうした今日の社会状況を踏まえて構想されている。各論の概要は以下のとおりである。

まず、戦時期の南方（東南アジア）に関する論考として、楠井論と佐藤論の二編を掲載した。楠井清文「森三千代の南方体験と移動する女性表象」は、森三千代の南方小説に多く表れた移動する女性像を考察している。最初の南方体験にあたるマレー・蘭印を舞台とした小説について、日本国内の家制度に馴染めない女性たちが居場所を求めて南方へ移動する姿が描かれていることを指摘し、二度目の南方体験にあたる仏印を舞台とした小説については、抑圧された女性たちへの共感を示しながら仏印の文化構造を複層的に捉える視点があることを論じている。佐藤貴之「占領とユーモア小説——北町一郎のシンガポール現地小説を中心に——」は、戦時中に若手のユーモア作家として注目された北町一郎が南方徴用時に執筆した小説「星座と花」を考察している。シンガポールのユーモラスな日常を描いた同作品について、政治的要請との親和性を後景化しながら「現地小説」として流通した過程を指摘し、

さらに、題名中の「花」が持つ人種や民族のジェンダー化された比喩としての様態を明らかにしている。

次に、戦後の中国に関する論考として、藤原崇雅「ドモ又」の共済——戦後上海における日本人居留民の演劇活動——」を掲載した。同論では、蒋介石派国民党によって統治された戦後上海で日本人居留民が行った演劇活動について考察し、大正期の保守的な画壇に反抗する画家たちを描いた有島武郎の戯曲「ドモ又の死」が、居留民たちによって戦時下の日本社会における圧迫や戦後上海における集中区での困窮に読み替えられ、さらに、こうした演劇活動が、居留民を合理的に管理・統治するための一翼を担った可能性を指摘している。

最後に、樺太出身の在日朝鮮人二世である李恢成の小説に関する論考として、奥村論と原論の二編を掲載した。奥村華子「母」たちをめぐる声——李恢成『砧をうつ女』、『またふたたびの道』にみる樺太の記憶」は、李恢成の来歴に沿って綴られたという副題に掲げた二つの小説を考察している。戦後の現在の視点から一九四四年の母の死を回想する『砧をうつ女』については、語り手が「聞き手」として母に関する祖母や父の語りを繋ぎ合わせる過程において母自身の声が混入していることを指摘して、そこに先行研究で多く論じられてきた母を「民族の娘」という一つの形象に回収しようとする力学を相対化する可能性を捉え、一九六九年前後の義母との別れを物語る『またふたたびの道』については、宛先を持たない義母の「独白」が直接の「聞き手」である息子の哲午^{テオルホ}を介して他者へ間接的に届けられることで、この一家に起きた悲劇が家族の問題としてだけでなく植民地期の朝鮮人女性の生をめぐる言説に拡張する可能性を看取している。原佑介「植民者二世と被植民者二世のポストコロニアルの再会——李恢成「証人のいない光景」を手がかりに」は、戦時期に植民地樺太で生まれ育った朝鮮と日本の旧「皇国少年」が数十年ぶりに再会する物語を考察している。日本人の矢田修は、終戦翌月に見た日本兵の腐乱死体に神国幻想の崩壊を感じたトラウマを告げる一方で、同じ光景を見たはずの朝鮮人の金文浩はその記憶が一切ない。代わりに、金文浩あるいは李恢成自身や彼の他作品では、朝鮮人の「同化少年」であった彼らが終戦後も皇民化教育の幻影にさいなまれる様子が描かれており、こうしたトラウマの差異がもたらす植民者と被植民者の「出会い損ない」によつ

て、植民地主義の歴史が戦後日本にも持ち越されていることを論じている。

近代は日本人が海外に移動を開始し、植民地等の支配を継続した時間である。そうした時間において、日本人はアジアの土地やそこに住む人々をどのように想像してきたのか。また、当地の人々は自らの声をどのように表象しようとし、それができなかつたのか。アジアをめぐる占領と開拓の検討は、現在、アジアの諸地域と日本に住む人々との関係を再考する一助となるはずである。

※「深刻な差別が頻発、政策でも NGO 団体代表・梁英聖さん」（『朝日新聞』二〇二〇年五月三一日朝刊）

（藤原崇雅・和田 崇）